

# 魅せる！ ハイテク駆使の世界選手権終わる

村越 真

7月28日から8月5日にかけて、フィンランドのタンペレ周辺で世界選手権が開催された。この世界選手権では、GPSによって選手の位置を把握し、会場にいる観客に見せる、TVで生中継するなど、様々な「見せる」工夫がなされていた。

## トレーニングキャンプに集う日本チーム

世界選手権の前には現地のテレインやコントロールの置き方に慣れるためのトレーニングキャンプが必ず行われる。多くの強豪チームは6月に行われるトレーニングキャンプに参加して大会テレインに慣れ、大会前は直前に現地入りをする。日本をはじめとするノン・ヨーロッパ諸国や連盟にそれほど資金力のないチームには、二度も遠征するような贅沢はできないから、直前のトレーニングキャンプで現地のテレインに慣れるためのトレーニングを行う。今年の日本チームは20日よりこのトレーニングキャンプを行った。

6月よりすでに現地に来ていた落合志保子、7月のフィン5より遠征している高橋善徳、塩田美佐に、20日に出発した鹿島田、松沢、金並、中村、安井が合流し、21日よりトレーニングを開始する。また21日にはチームマネージャーの藤井、22日には、村越と田島、コーチの山岸が合流した。

トレーニングは地形と地図の照合・確認のためのゆっくりしたコース巡り、短いコースでのタイムトライアルなどから始まり、24日と26日には、レース形式の練習も行った。特に26日のレースは、出場種目を決めるテストレースでもある。その前前日の24日には最後のチームメンバーの加賀屋が到着し、チーム全員がタンペレに集合した。

## 宿舎は警察学校

今回のトレーニングキャンプと世界選手権の宿舎となった場所は、タンペレにある警察学校の宿舎であった。警察学校の宿舎というと、なんとなく殺風景で設備もお粗末な場所のイメージがある。しかし実際の警察学校はツインのベッドルーム4部屋にチーム全員でミーティングのできる大きなダイニングがある立派な宿舎だった。食事を除くと、いって快道であったが、キッチンもあるので必要に応じて米を炊いたり日本食を作って、食事への不満を解消した。おまけにこの宿舎には6階にはサウナがあって、自由に使えるようになっている。6月に出かけた時にも、宿舎は専門学校とその寄宿舎であったが、設備はほぼ同等であった。このような宿舎が夏の期間に利用可能なことは、大会運営上うらやましい限りであった。



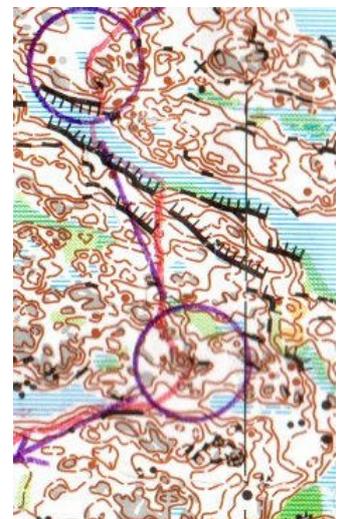
宿所にあるサウナ

この警察学校はタンペレ市の南郊にあるニュータウンの傍らにある。市街地から車で10分の至便な距離で、バスで市街地に出ることも容易であった。その反面、走って10分もすると、森と湖の広がる好環境であった。私たちもレースがない日にはその森のトレイルにジョギングに出かけたり、湖で水浴びをするなど、余暇を楽しんだ。

## 出場選手決まる

26日は、それまでクローズだったテレインでテストレースを行った。選手のテレインへの適応を把握するとともに、成績によって出場するレースを決定することが狙いである。地図・地形とも申し分なく、十分世界選手権も開催できそうなテレインである。それまでのトレーニングでは日本チームの対応は比較的順調に思われたが、レースとなると気負いやスピードに乗りやすいことから、日本チームの多くの選手が細かい地形に対応できず、選手選考にコーチが頭を悩ます結果となった。その結果、男子は鹿島田、村越、松沢、高橋が、女子は落合、金並、塩田、中村がクラシックの予選を、男子安井と女子田島が今回初であるスプリントを走ることになった。

その後のリレーとショートの出場者に関してはスプリントやクラシックの結果を見て決めようということになった。今回は1週間で4種目(レース数では6)というハードな日程であったため、多くのチームが事前に選手によって出場レースを決めてきていたが、直前のトレーニングキャンプしかない日本チームにとっては、辛いとは言え、レースをしながら出場レースを調整していくしか方法はないであろう。



世界選手権のテレイン

## いよいよ開幕

28日、夕方開会式があり、世界選手権が開幕した。フィンランド第三の都市の中心街の交通を遮断して行進し、市庁舎前の広場での開会式であった。アトラクションも軽く、ナイスな開会式であった。



開会式の入行準備をする日本チーム

開会式における恒例の IOF 会長の挨拶の中で、7月に開かれたユッコラ（フィンランドで開かれる7人リレー。フィンランドだけでなく、北欧の有力クラブが参加する）でのフラウケ・シュミットの行為が譴責された。このリレーで優勝候補の一つであるハルデンの第一チームの1走としてスタートしたフラウケは、コース途中、枝を太股に差し、出血しているロシア選手の悲鳴を聞いた。かけつけた彼女は自分の上着を脱いで止血し、他のランナーによって呼ばれた救助を待った。その間通りがかったハルデン第三チームのジェニー・ステーションが交代して、フラウケはレースを続けた。「もう無我夢中で、次のコントロール番号さえ覚えられなかった。フラッグを見つけて、あれ、これコントロール番号が違うかしら、やっぱりあってるね、っていうような調子だったのよ。だから一つ一つやっつけていこうと思ったわ」と、その時の様子を語ってくれた。ゴールで見ていた落合は、スポーツブラ姿でゴールをするフラウケを見て、「あれ、暑くて脱いだのかな。それにしてもゼッケンもつけてなくておかしいな」と思ったそうだ。ハルデン第一チームはフラウケの遅れを挽回し、6位に入った。そのロシア選手は、処置が遅れていたらおそらく助からなかったであろうほどの大出血であったそうだ。

## 初のスプリント種目登場

29日、世界選手権初のスプリント種目で今回の世界選手権のレースが開幕する。メディアフレンドリー、観客フレンドリーをうたい文句にするこの大会では、スタートはゴールと同じ会場、そして会場には巨大なスクリーンにスタート時やゴール、そして中間のコントロールを取る選手の映像が流されていた。まず女子から始まるこのレースで、日本選手の田島は2番目スタート。惜しくも「世界初のスプリントランナー」の座を逃した。このレースでは田島が40位、安井は39位であった。特に安井は50人中の順位でトップと2分少々。日本で十分トレーニングを積むことのできないこの種目で、しかも初出場、単純に順位だけを見るなら、日本人選手史上3位タイの順位でもある。反面、このタイムでも39位なのだから、スプリントは一つのミスやもたつきが結果を決める厳しいレースだと言える。



スタートに立つ田島

スタート・フィニッシュのカメラに加え、中間区間にもカメラが設置され、その様子は随時会場のスクリーンに映し出されていた。また森の中の一部の道には観客の立入りが許されるなど、これまでのオリエンテリングでは考えられない設定であった。このあたりの評価にも、今後詳細なフォローアップが必要であろう。



スプリント種目で最初の世界選手権者となった Vroni (スイス:左) と Jimmy (スウェーデン:右)

(WOC2001のwebページより転載)

### スプリントレース

男子：2,66 km (49名)

1. Jimmy Birkin (SWE) 10.55,9

39. 安井真人 (日本) 13.02,5

女子：2,24 km (45名)

1. Vroni Konig-Salmi (SUI) 10.54,9

40. 田島利佳 (日本) 15.46,5

## 厳しいクラシック

翌30日はクラシックの予選である。予選とは言ってもそれを通ることが目標である日本チームにとっては、正念場でもある。今回の目標は複数名が予選を通過すること。村越と鹿島田だけによっても十分可能な目標に思われた。私自身はかなりいいレースが出来、優勝予想が60分のところを63分でゴール。さすがにトップが60分とは思わなかったけれど、十分通過可能に思えた。スタート順が37番目でゴール時にアナウンスが15位と言っているのが聞こえた。計算上は全67人中30位に入れそうだ。スタートの早かった鹿島田も、いいレースで65分59秒。ゴール時に思わず「ああ、これで長年の夢が叶った」と思ったそうだ。しかし、その後続々と後からスタートする選手にタイムで上回られ、結局38位に終わった。高橋は大きな1ミスがひびき、その後レースをまとめたものの73分12秒(50位)。また松岡翔洋うまくしのいだものの1ミス後ミスを重ねて79分47秒(51位)と沈んだ。また女子は落合が68分55秒とまずまずのタイムで走ったものの46位、金並は74分47秒でやはり46位、中村は80分11秒、塩田が76分35秒という結果であった。このレース結果によって、男子は鹿島田、村越、加賀屋、高橋が、女子は金並、田島、落合、塩田(いずれも走順のとおり)がリレーの選手として決定した。

### クラシカル予選

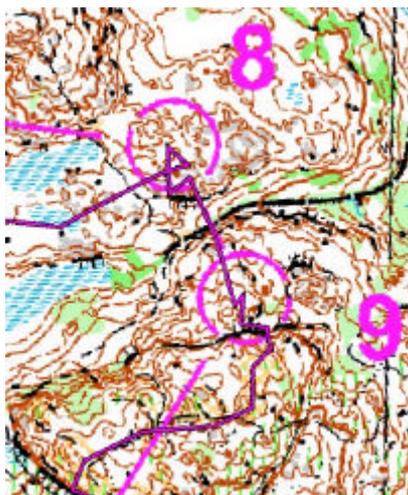
男子-1 : 8,8 km (69名)
1. Tobias Andersson (SWE) 53.18
25. 村越 真 (日本) 1.03.12
51. 松澤俊行 (日本) 1.19.47

男子-2 : 8,8 km (68名)
1. Mats Troeng (SWE) 53.22
38. 鹿島田浩司 (日本) 1.05.59
50. 高橋善徳 (日本) 1.13.12

女子-1 : 5,8 km (54名)
1. Yvette Baker (GBR) 42.58
46. 金並由香 (日本) 1.14.47
51. 中村正子 (日本) 1.20.11

女子-2 : 5,8 km (54名)
1. Emma Engstrand (SWE) 41.23
46. 落合志保子 (日本) 1.08.55
49. 塩田美佐 (日本) 1.16.35

に続いて2冠。女子は昨年からの好調のスイスのシモネ・ルーダであった。



女子優勝者シモネ・ルーダのGPSトラッキングデータ  
小さなミスなどがはっきりと判る。  
(WOC2001のwebサイトより引用)

## リレーは男女とも不覚のウムスタート

翌8月1日は休養日。そして2日がリレーである。通常リレーは世界選手権の最後を飾る種目というスケジュールが組まれているが、今回はショート決勝のTV放映の関係もあって、リレーが会期中中に設定されていた。またこれまでのリレーでは男女が同一の時間帯で競技を行っていたが、今回は午前が女子、午後が男子と時間帯が分離されていた。これによって、観客がそれぞれの競技の展開を追いやすくなっている。この設定は選手にとっては大きな違いはないが、チームを世話するオフィシャルにとっては、朝から夕方まで仕事があるというつらい一日となった。

午前に行われた女子のリレーでは、1走の金並が出遅れアメリカに5分差の最下位でタッチ。2走田島が追い上げ、その差を3分弱に縮めた。フィンランドで2月にわたるトレーニングを積んだ落合に期待がかかるが、彼女も今一つ振るわず、73分とアメリカとの差は3分ほど広がってしまった。また今回は競技進行上ウムスタートの設定が非常に早く、アメリカと日本はウムスタートとなってしまった。4走塩田もテレインに対応できず、合計タイム的にも最下位であった。

午後の男子のリレーでは前回も1走で結果を残した鹿島田の走りが注目された。中間コントロールではトップと5分差で通過、後半に期待が持たれたが、ゴールしてみると結果は70分と、トップと20分もの差がついていた。途中コンパスを壊してしまったのだ。目標順位を大きく下回る33位でスタートした村越も、ベースに乗り切れず63分。それでもこの順位では、順位を2位上げた。3走からはコースが短くなり、トップが33分程度のコースである。ここで加賀屋は48分のレースで順位を守る。男子のリレーもウムスタートは厳しく、男子チーム世界選手権史上初のウムスタートとなった。他の7選手と一緒にウムスタートした高橋は快走し、44分のタイム。結局合計では3時間44分の26位となった(公式記録では4チーム失格が出たので22位)。失格の原因は不明であるが、Eカードのなんらかのトラブルも考えられている。

### クラシカル決勝

男子 : 14,4 km
1. Jorgen Rostrup (NOR) 1.29.43
2. Jani Lakanen (FIN) 1.30.17
3. Carl. H. Bjorseth (NOR) 1.31.58
56. 村越 真 (日本) 2.09.03

女子 : 9,7 km
1. Simone Luder (SUI) 1.14.57
2. Marika Mikkola (FIN) 1.15.00
3. Reeta Kolkkala (FIN) 1.15.43



クラシックスタートの村越

31日のクラシック決勝では、日本からは予選を通過した村越だけが出走した。世界選手権史上初めてスタートがフィニッシュ地区と一緒に会場設定である。選手は観客とは隔離されたプレスタートからおよそ600m走って、観客の待つ会場にスタート直前に至る。そして、眼前にある大スクリーンに映される自分の姿をみながら大歓声の中をスタートしていく。さすがに前日の疲れを隠せなかった村越は、前半はまずまずのペースだったが、後半エネルギー切れを起こして56位と振るわなかった。優勝は、地元のヤニ・ラカネンを抑えたノルウェーのヨルゲンが北欧選手権



優勝が決まった瞬間もクールなヨルゲン・ロストラップ

リレーでは結局男女とも目標を下回る結果となった。またそれによって世界の高速化の流れを痛感させられる結果となった。



リレー フィンランド男子のウイニングラン  
地元フィンランドはリレー男女とも優勝を飾った

## リレー

### 女子

1	フィンランド	2.37.01
2	スウェーデン	2.41.00
3	ノルウェー	2.41.00
4	スイス	2.43.22
5	イギリス	2.50.51
6	ドイツ	2.51.47
7	チェコ	2.52.48
8	エストニア	2.52.54
9	デンマーク	3.02.16
10	ロシア	3.02.45
11	オーストラリア	3.08.19
12	オーストリア	3.13.34
13	スロバキア	3.18.56
14	ハンガリー	3.19.18
15	ウクライナ	3.19.29
16	ラトビア	3.24.40
17	カナダ	3.33.27
18	アメリカ	3.50.08
19	日本	4.31.56

### 男子

1	フィンランド	2.48.53
2	ノルウェー	2.50.59
3	チェコ	2.52.25
4	ロシア	2.52.56
5	スイス	2.54.28
6	オーストラリア	2.58.02
7	リトアニア	3.00.57
8	イギリス	3.01.27
9	エストニア	3.07.03
10	ラトビア	3.07.17
11	フランス	3.12.00
12	ポーランド	3.14.37
13	スロバキア	3.14.43
14	ウクライナ	3.16.48
15	ハンガリー	3.17.32
16	オーストリア	3.19.58
17	ドイツ	3.21.09
18	ベラルーシ	3.21.25
19	ニュージーランド	3.25.27
20	アイルランド	3.28.05
21	ベルギー	3.41.23
22	日本	3.44.14
23	スペイン	3.45.47
24	ブルガリア	3.56.14
25	アメリカ	3.59.34
26	カナダ	4.00.17
27	イスラエル	4.24.59
28	カザフスタン	5.26.17
29	香港	5.44.55

## ショートはますます高速化への流れ

3日にはショートの子選が行われた。このレースには男子は村越、鹿島田、松沢、安井が、女子は落合、田島、金並、中村が参加した。男女とも予選通過者はなかったものの、金並が16位となって女子としては久しぶりに予選通過の可能性を示した他、田島も22位ながらラップタイム的には十分通過可能なレース内容であったことや、安井に一桁代のラップなど、見るべき内容はあった。反対に村越や松澤は、安定したレースをしたもののラップの順位ではいずれも奮わず、このペースでの予選通過は難しい。難度の高いテレインであったが、それでも世界は高速化の方向にシフトしていると感じさせられた。

### ショート予選

#### 男子1

1.	Pasi Ikonen (FIN)	21.57
29.	鹿島田浩二 (日本)	36.29

#### 男子2

1.	Carsten Jorgensen (DEN)	23.42
25.	松澤俊行 (日本)	30.17

#### 男子3

1.	Valentin Novikov (RUS)	23.10
27.	安井真人 (日本)	34.00

#### 男子4

1.	Jorgen Rostrup (NOR)	22.28
21.	村越 真 (日本)	28.50

#### 女子1

1.	Gunilla Svard (SUI)	24.19
23.	中村正子 (日本)	41.46

#### 女子2

1.	Anette Granstedt (SWE)	22.36
22.	田島利佳 (日本)	41.02

#### 女子3

1.	Vroni Konig-Salmi (SUI)	24.11
19.	落合志保子 (日本)	38.22

#### 女子4

1.	Simone Luder (SUI)	24.28
16.	金並由香 (日本)	33.05

最終日の4日のショート決勝では、クラシックで惜しくも優勝を逃したヤニ・ラカネンが一時トップに立ったが、同僚のバシ・イコネンやノルウェーのヨルゲン・ロストラップ、トーレ・サンドビクに破れ、4位となった。また女子は中間では遅れをとっていたハンネ・スタッフが後半タイムを伸ばし、ショートとしては初の金メダルを獲得した。リレ

一、ショート予選と同一の会場を使いながら、決勝にもっともふさわしいテクニカルなテレインが用意され、そのテレインの中でも正確なナビゲーション技術で無難なレースをした者が勝者に輝いた。

### ショート決勝

MEN : 4,1 km

1. Pasi Ikonen (FIN) 23.41
2. Tore Sandvik (NOR) 24.02
3. Jorgen Rostrup (NOR) 24.15

WOMEN : 3,6 km

1. Hanne Staff (NOR) 25.41
2. Jenny Johansson (SWE) 25.54
3. Gunilla Svard (SWE) 25.58

## GPS と映像で、見せる WOC を演出

今回の世界選手権のテーマは「オリエンテーリングを見ごたえのあるスポーツに」である。そのために GPS によって選手の居場所をリアルタイムで捉え、会場にいる人々にも随時情報として提供する、テレインの中に数多くのビデオカメラを持ち込み、その映像を会場で流す、レース展開によって変わる順位を刻々と反映させる電光掲示板など、様々な試みが為された。またこの様子はフィンランドのテレビで長い日は3時間にわたって放映された。

コースや会場レイアウトも見ごたえのあるものにするための工夫がなされていた。スタートはすべての決勝とリレーでフィニッシュと同一の場所に設定されていた。選手は観客の歓声の中、森に消え、そして声援とともにフィニッシュに帰ってくるのである。クラシックのコースなど後半に伐採地を通過する、むやみにアボガリオ(肌岩山)の上に登るなど、テレビカメラでの選手の捕捉を容易にするためのコースの妥協が随所になされていた。そのせいもあって、クラシックのコースは決して評判のよいものではなかった。



### 男子クラシカル決勝

TV中継の為に同一コントロールを3回も通過するコースセットになっている。

見ごたえのあるスポーツにするためのもっとも成功した努力が会場に設置された巨大スクリーンである。このスクリーンでスタート台に緊張の面持ちで立つ選手の様子、森の中での走りやミス、そして優勝決定の喜びの表情や後からスタートしたランナーに抜かれたときの無念の表情などが、すべての観客に与えられた。あまりに映像やその展開が優れていたため、観客の多くは、自分のすぐ後ろのフィニッシュレーンを走る実際の選手ではなく、スクリーンに声援を送っていたほどだった。

コースの妥協を除けばこのような工夫は選手にとってもおおむね好評であった。私自身の個人的な経験でも、プレスタートし、だんだん会場が近づくにつれ、観客の声援・興奮が伝わってくると、こちらまで興奮してくる。スタート台にたつて、左正面の巨大なスクリーンに自分の姿が大写しになっている姿を見ると、鳥肌が立つ。こういう舞台の中を走れることだけでも予選を通過する価値があると思えるほどだった。

もちろん、観客やメディアに見やすいレースが必ずしもチームにとって望ましいものではない。成績表はチームよりもプレスに正確なものが配布される、予選の会場でもボーダーにいる選手に関する情報がなかなか流れない、リレーでは下位チームが上位や周囲のチームとどれだけ離れているかという情報が皆無に近かった。選手やチームにとって何が重要かという視点は殆どなかった。

メディア受けを狙うということは、上位を狙える、限られた選手に篤い大会運営がなされることでもある。それが本当にこのスポーツの将来にとっていいことかどうかは、まだまだ議論の余地があるだろう。

## 多くの役員に支えられた運営

ハイテクを駆使した運営も、多くの人間の手が必要な点は通常の大会と大差ない。むしろ、森の中での撮影などでは、普段にもまして多くの役員が活動していた。特に一部のテレビコントロールでは、選手の動きを補足するために、想定されるルート上にしばしば役員がたたずんだり寝そべったりしており、驚くこともしばしばだった。

会場には揃いの青いポロシャツを着た役員が随所に立ち、運営層の厚さを見せ付けられた。運営の中核にあるのは、コーベとピリントというタンペレにある二つのオリエンテーリングクラブであるが、末端の役員の中には遠隔地からのボランティアもいたようである。市街地のはずれにあるスケート場のアリーナが、役員の大規模な泊り所になっていた。日本でいえば体育館に泊まりながらの運営である。このような



役員への仕事の割り振りも非常にシステムティックに行われていた様子だ。その分末端の役員では融通が利かず、TVクルーは車で会場に乗り入れているにも関わらずIOF会長の車が交通遮断という理由で会場への乗り入れを拒否される、ピントはずれの対応がなされるなどの問題点もあった。しかし、こうした事態は運営が巨大化されれば、ある程度やむをえないものなのであろう。

## 怪我が多発

フィンランドは競技者に怪我が多いことで有名である。すでに触れたフラウケの話もフィンランドで起こった事故での話だ。またフィンランドのエリート選手の中にはスポーツグラスをつけて走っているものが多い。これは木の枝によって失明した選手があったことによる。私自身、レース中枝に激突し、角膜に傷をつけたことが2度もあった。大事には至らなかったが、今回の日本チームでも、加賀屋がひざをうち2針の怪我、高橋に至っては耳を貫通する怪我であった。フィンランドに限らず、競技が高度化・スピードすればこうした怪我が増えることにも私たちは注意する必要があるだろう。

なお今回の世界選手権の様子は、<http://www.woc2001.fi/> でかなり詳しく見ることができる。成績やラップタイムはもとより、会場での写真、また上位のみならず50位までのクラシック決勝のルートがGPSにより見ることができる。興味ある方、若い選手には是非覗いてほしいサイトである。

## 口コミとネットの融合 - これからの大会マーケティング

<平成 13 年度全国一斉大会長野大会>

木村佳司

6月、全国一斉大会が各地で開催された。今年から日本オリエンテーリング協会が統一的な広報・募集を行うのではなく、各地方に完全に運営が任せられた。長野会場では、口コミとネットの融合により、約100名の参加者を集めることに成功した。

全国一斉大会が始まって3年目になる。全国一斉大会はパーマネントコースを活用することを基本としているが、長野の場合は少し違う。全国一斉大会の度にニューマップを作成しているのである。といっても本格的な競技用の地図ではなく、基本的には公園を利用したパークO用の地図である。

パークOはオリエンテーリング初心者にとって、とても入りやすく、特にファミリー向けには最適である。またパークOでも地図の精度を上げ、レーススピードを上げるようなコースを設定する事により、ベテランオリエンティアの要求にもある程度応えることができるという便利な方法である。そして何と云っても、事前準備や大会運営が楽で大会主催者の負担が少ない。参加者の多くないイベントを継続開催するにあたって、これは大きい。

ニューマップを作成する時に問題なのが経費であるが、最近はコンピュータCADによる地図作成と、高品質の家庭用カラープリンタ、コンビニエンスストアで利用できる安価なカラーコピーの登場により、少数であれば品質の良い地図が安価に作成できるようになった。

今回の長野会場は除外・地図調査・地図作成・広報・事前受付・設置に至るまで、一人で行った。さすがに当日は10名程度の運営者に協力をいただいた。しかし専任運営者は一人であり、ほぼ全ての運営者は同時に参加者でもあった。

こんな中、長野会場は参加者約100名を集めた。トップアスリートからボーイスカウトまでさまざまな層からエントリがあった訳であるが、少ない労力でこれだけの人が集まったのは、その広報手段と企画によるものであろう。

まず、もっとも重視したのは、クチコミによる大会の前評判である。どんな大々的な広報を行おうとも、実際の参加者の心を掴んで参加する気にさせなければ、その効果は現れない。最も参加者の心を掴むメディアは「知人からの薦め」であろう。これは今も昔も変わらない。

大会の前評判を作るためには、かなり早い段階から広報を行うことが大切である。全国一斉大会ももう3回目なので、関係者の間ではある程度の知名度がある。これを実際のイベントである、「長野県松本市の信州スカイパーク」という場所と、「参加すると面白いらしい」というイメージを早い段階から広い層に浸透させることが重要である。

この活動を行うときに多用したメディアが電子メールを使用した連絡網「メーリングリスト」である。また、長野県協会の会報などにもコメントを掲載するように努めた。まだまだ対象人数は少ないのだが、イベント1年前から、徐々に全国一斉長野会場2001に関する情報を浸透させていった。

この前評判を作る時のポイントとして重要なのは、掲載する文章やキャッチコピーは、参加者の視点に立ったものであることである。時には口語体や個人的な感想も交えて、読む人の脳髄を直撃するような語りで惹きつけることである。間違ってもお役所文書は字づらだけで敬遠されてしまうだろう。楽しいイベントを実施し、どれを広報するのだから、その募集の語り口も楽しいものであることが重要だろう。

それと今回、多くの人が集まってくれたのは、広域公園という場所によるところも大きい。ボーイスカウトなどの初心者でも安心して参加できる。地元の人なら誰でも場所を知っていて、集合場所を迷う事がない。これだけでも情報の伝達力が違ってくる。さらに子供連れでも、オリエンテーリング後などに遊具で遊ばせておくことができる。など、場所による魅力も大きい。

もうひとつ、今回の大会では通常のパークOでは体験できないような長いコース10kmコースを用意した。これが愛好家・上級者のチャレンジ魂をくすぐった。

( 31 ページへ続く )